



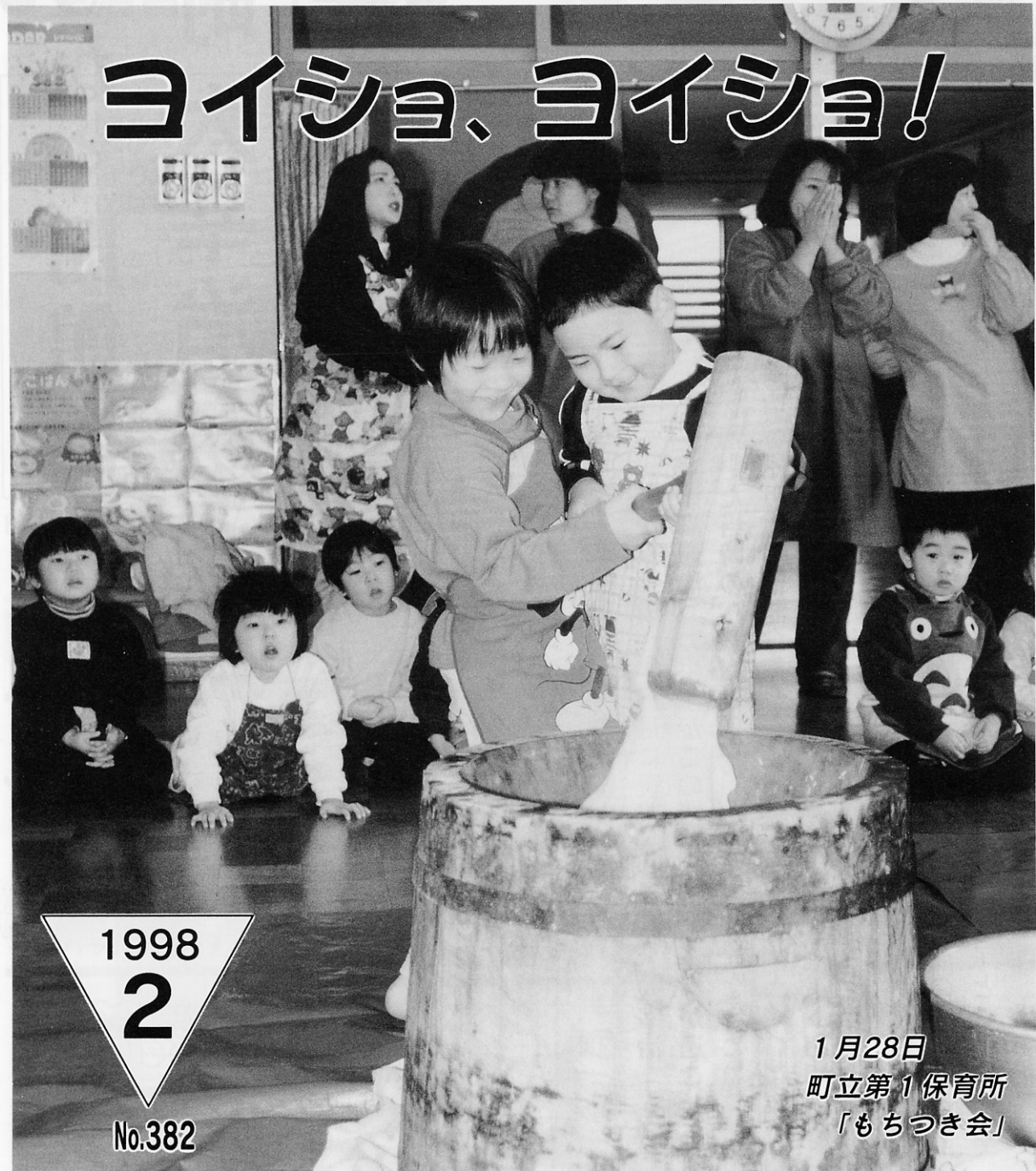
広報

かなぎ

編集と発行

金木町企画室

青森県北津軽郡金木町
大字金木字朝日山323
電話☎2111 内線240



ヨイショ、ヨイショ!

1998
2

No.382

1月28日
町立第1保育所
「もちつき会」

— 間もなく開館 —

金木町 太宰治記念館

『斜陽館』

町が、平成八年三月に買収した作家・太宰治（本名「津島修治」）の生家がこの四月から、太宰が過ごしていた当時の〈源（ヤマゲン）・旧津島邸そのままに、「金木町太宰治記念館『斜陽館』』としてオープンします。太宰没後半世紀を迎える今年、再スタートを切るこの建物は、明治、大正、昭和、平成とその姿をほとんど変えることなく町の中心部にそびえ建ってきました。復元修復工事が終わり、今後は展示品の整備などを残すだけとなりましたので、現在の様子とこの建物のルーツを紹介します。



◎ 幕 末

明治維新以後、土農工商の身分制度がなくなり、版籍奉還、廃藩置県と新たな施策が講じられる中、津軽藩でも職を失った武士の救済措置として「土族帰農政策」を進めた。藩は、十町歩以上の田畑所有者に対し、十町歩を残してすべてを献田もしくは買上げ、それを土族に分け与えることにした。

津島家当主・惣助は、三町歩を売り渡し、農作業に従事する傍ら油売りや荒物などの行商をしながら金貸し業を営み、財を蓄えていた。

土地を与えられた土族たちは、慣れない農作業と凶作続きの農業に見切りをつけて農地を手離し、移住する者や転職する者が増えていった。この土地を次々と買い占めた惣助は、十三町歩の小地主からやがて二百町歩の大地主へとなっていく。その一方で、冷害に苦しむ零細自作農の百姓たちは、わずかな農地を抵当

にして金を借り、返済のあてのないまま自然に小作農家に転落していく。

同じころ、同様に呉服商と金貸し業を営んで、県下一の富豪にのしあがったのが五所川原の「布嘉」佐々木嘉太郎で、六百町歩を所有していた。

◎ 大地主の邸宅

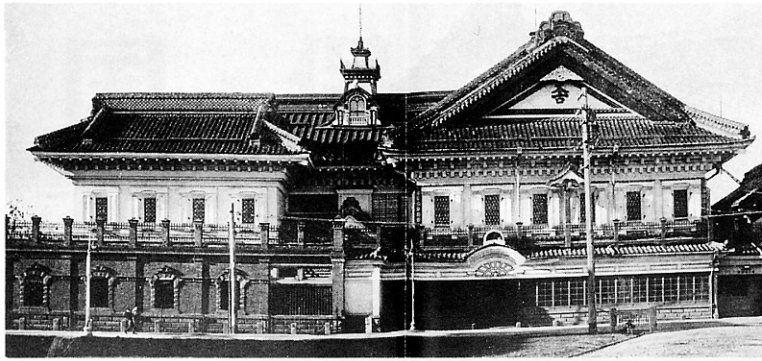
子供がなかった惣助は、義弟の惣五郎と姪のいしを夫婦養子にした。この夫婦の男児は生後間もなく亡くなっている。津島家では、いしの長女・たねに、木造村の旧家・松木家から四男である永三郎（明治二十一年、十八歳）を婿養子に迎える。

松木家は、代々から造り酒屋を営んで、先の土族帰農政策では八十三町歩を藩に売り渡しており、津島家より上の豪農であった。永三郎の父・八代目七右衛門のころは葉種問屋を営み、その屋敷は九百七十坪であったという。後年、太宰はこの葉種問屋を訪れる。永三郎を迎えた翌年、惣五

郎が亡くなり、津島家には惣助と永三郎の二人の婿養子が残ることとなる。惣助は永三郎を、三代続いた自分の名前ではなく初代惣助の前の時代、潰れかかっていた津島家を再興した、と伝えられる津島家ゆかりの源右衛門に改名させる。営んでいた金貸し業も「銀行」と改め、金木銀行を設立し源右衛門を頭取に据える。

明治三十三年、家督を受け継いだ源右衛門は、政治家の道を志す。県議会議員、衆議院議員、貴族院多額納税議員となっていく源右衛門にとって県議会議員時代に住んでいた家は、みすばらしく感じたのであろうか？

富豪佐々木家（敷地約三千六百坪、建坪約九百坪、明治二十九年に約十万余円で建築）には及ばないまでも、生家松木家並みの屋敷に、と思いを馳せたのだろう。大地主にふさわしい地位と名誉を手に入れた源右衛門は、養祖父・惣助が亡くなった翌年の明治三十九年から新築に取りかかり、



▲富豪「布嘉」佐々木邸。外観を模作したといわれる

明治四十年六月に完成。広いたたき、仏間、客間、常居(居間)などの配置は木造の生家に、象徴ともいえる赤レンガ塀や正面の鉄格子は小作農騒動に備えたものか。その外観は布嘉邸にも似ているといわれ、津島邸と布嘉邸はともに弘前市の堀江佐吉が設計に携わる。太宰も小説「津軽」の中で、松木家に立ち寄った際

津島家は、もはや油売りや木綿屋の看板を掲げる必要が無くなった。じつとしていけば、小作米が入ってくる。大地主の暮らしを支える小作人たちは、近隣村を含め三百人近い村を囲む。その中心に源右衛門がそびえ立っていた。しかし、源右衛門も大正十二年、この世を去ることとなる。

のこを、「この家の間取りは、金木の家の間取りとたいへん似ている。金木のいまの家は、私の父が金木へ養子に来て間もなく自身の設計で大改築したものだ」という話を聞いているが、何の事は無い、父は金木へ来て自分の木造の生家と同じ間取りに作り直しただけの事なのだ。私には養子の父の心理が何かわかるような気がして、微笑ましかった。そう思っただけだと、お庭の木石の配置なども、どこやら似ている」と書き記している。

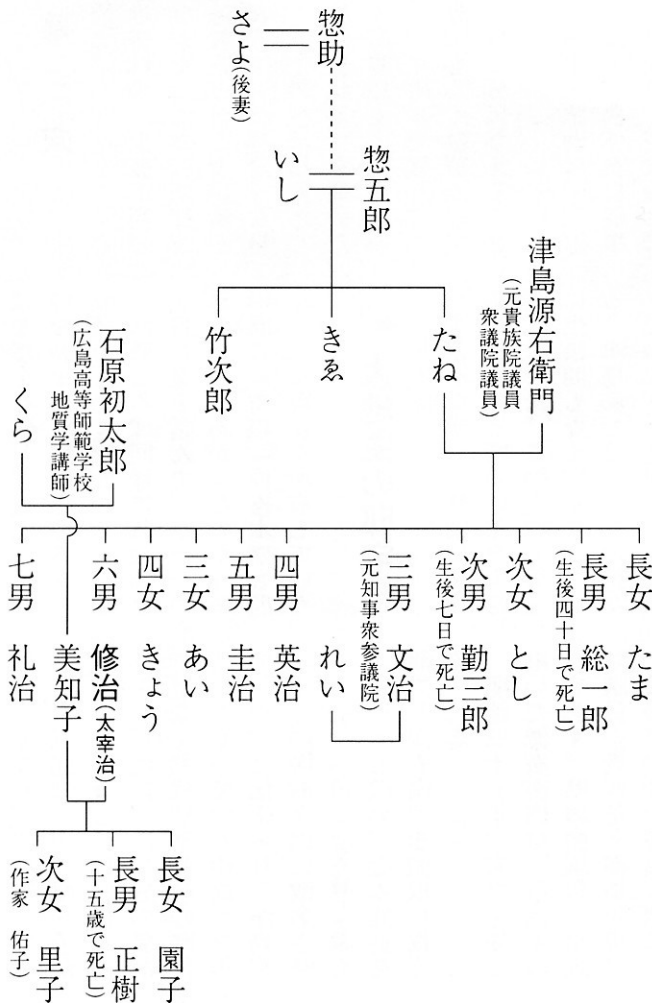
◎ 民主化による農地改革

父・源右衛門の跡を継いだ長子・文治は、金木町長、県議会議員、衆議院議員、そして初代の民選青森県知事、参議院議員となる。
終戦後、連合軍総司令部(GHQ)は財閥解体や婦人参政権の新選挙法成立、農地改革など、日本の民主化を推進させた。農地調整法ができた。地主が一定以上の土地を保有

できなくなったことは、ヤマゲンの衰退に拍車をかけることとなる。
田んぼを失った地主たちは、ことごとく財を失い没落して上あつた田畑が次々と無くなっていく。創業以来、順調な経営を続けていた金木銀行も昭和十三年、第五十九銀行(後の青森銀行)に買収合併されて今は無い。政治にも金がかかる。意を決した文治は昭和二十三年、金木町長の角

田んぼを失った地主たちは、こととなる。田唯五郎に家屋敷を売り渡すことになる。県下有数の大地主となった源右衛門が財力に任せ建てた、力と富の象徴だった家を、である。
その後、唯五郎の娘が一部を改築し「ヤマゲン」を改め、「斜陽館」として旅館業をスタートさせた。経営者が変わったものの、諸般の事情により旅館「斜陽館」は平成八年に町が買収し、惜しまれつつ約半世紀の歴史に幕を閉じることになった。

▶ 津島家の家系図 ◀



◎ 魅る斜陽館

買収後、町では太宰が生まれ育った生家に復元すること、当事の生活を偲ばせ、全国的にも著名な作家の記念館として町の観光の拠点となるよう復元修復工事を行ってきた。屋根の全面ふき替えや外壁の塗り替え、旅館業時代に増改築した部分の撤去等を実施。

「木造一部二階建 亜鉛鉄板葺 入母屋造り主屋一棟」。ケヤキを使用した柱や鹿鳴館風の階段、天井には秋田スギを使っているものの、ほぼ総ヒバ造り。一階十一室百五十坪、二階八室百坪で赤いレンガ塀や豪華な庭園などから従来の栄華が偲ばれる建物。やはりこの建物とそれに関わった人物は、金木町とは切っても切り離せない強い絆で

結ばれていたような気がする。源右衛門は、自費を投じて金木地方の産馬改良に貢献したほか、県内では五番目の火力発電所の創設。文治は、政治家として各方面で活躍。また、津軽鉄道の開通に会社設立发起人として尽力した人。そして太宰治。

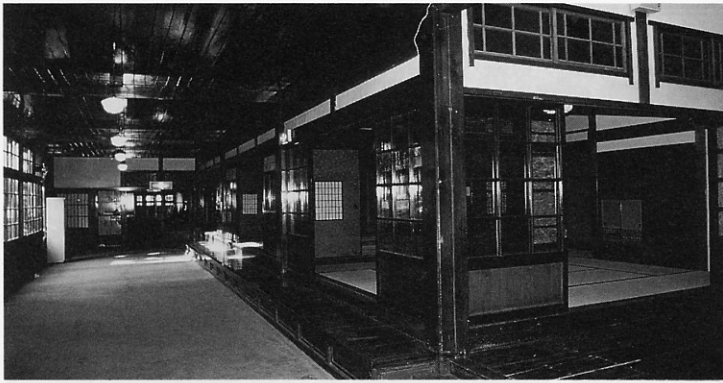
農地改革で財を成し、農地改革で財を失い、激動の時局を生きてきた彼らの残してくられた財産が、金木町の財産となっていると、いっても過言ではない。

町は今、太宰治記念館『斜陽館』オープンで新たな一歩を踏み出そうとしている。誇りをもてる町づくり、自信のもてる町づくりを目指し、その扉は間もなく開かれようとしている。

終わりにあたり、大変お世話になりました金木町太宰会・会長木下巽氏、写真を提供してくださった五所川原市史編纂室の方々に、あらためてお礼申し上げます。

●【参照】

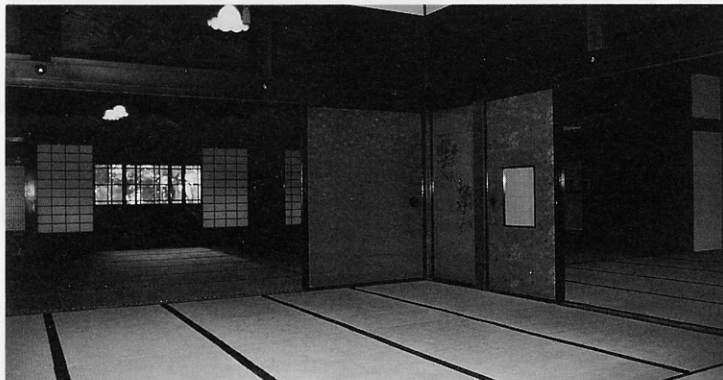
津島家の人びと



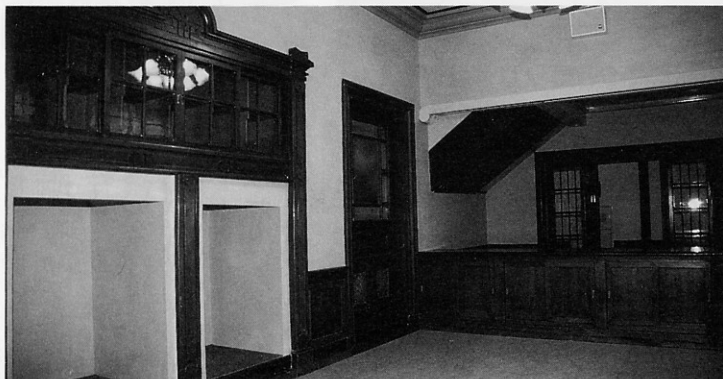
▲小作米の検査が行われた広いたたき



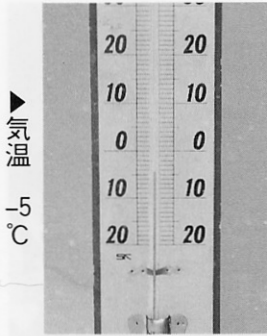
▲二階和室のふすまには「斜陽」の文字が



▲真新しい畳が敷かれた大広間



▲玄関のすぐ横にあるカウンターや金庫跡
銀行跡地かどうかは定かでない



▶気温 -5℃

マイナス5度の楽園

～地吹雪体験ツアー～



◀陰の主役「金太郎」



▲ツアーの成功を願いおほらいを受ける

▲寒さもなんのその！
笑顔がこぼれる



◀説明を受けながらかん
じきをつける参加者



▲強風と地吹雪に悪戦苦闘

「区切りの十周年を終えて、初心に帰って頑張りたい」と主催する津軽地吹雪会（会長＝角田周）関係者。首都圏から今回参加した親子や夫婦ら十四人は地方への移住希望者などで、毎回趣向を凝らすネーミングも「さらば東京！津軽へ来いへえ」「エターンプ



▲「こんなの初めて」と馬ソリ体験を楽しむ

今や押しも押されぬ、一大イベントとなった冬の観光の目玉「地吹雪体験ツアー」が一月二十五日、オープニングを迎えました。

暖冬はどこへやら。 雪、雪、雪。

「リザード」と名付け中里町、市浦村、小泊村とタイアップして行われました。津軽体験の最終日を迎えた一行は、名物のストープ列車に揺られ金木駅に到着しバス移動。町中は小雪がちらつく程度で、「今年も地吹雪はお預けか」と、心配する声もではじめた矢先、会場の藤枝地区に近付くにつれて視界が悪くなり吹雪模様。「地吹雪で一寸先も見えなくなる津軽」とはこのことか！……近年の地吹雪体験は、晴天ばかりと嘆いていた関係者も「絶好のコンディション」とはくはく顔？

「覚悟は決めてきた」と参加者は、説明を受けながらモンペ、角巻き、かんじき姿の地吹雪ルックに変身し、さっそうと雪原の中へ。あまりの風の強さと地吹雪に「気持ち前は前へといくものの、体はその場で立ち往生」。転倒者続出し笑い声さえ聞こえていました。その後、情緒あふれる馬ソリ体験やじゃっぴ汁に地酒「地吹雪」で冷えきった体に暖をとっていました。